

＝市史編さん便り＝ 【21号】 令和4年7月13日(水) 発行.

*****土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

◎昭和南海地震についての聞き取り調査を実施！

-土佐清水市郷土史同好会・国立公園ジオパーク推進課との連携-

近世に発生した宝永地震と嘉永(安政)地震等に関わる文献は、『谷陵記』、池道之助の記した「今昔大變記」等々、比較的資料が残されています。しかし、昭和南海地震の資料については、戦中戦後の混乱期であったこともあり、残された資料は少なく、その全容が解明されていません。そこで、その歴史の空白を埋めるためにも、生涯学習課(市史編さん室)・国立公園ジオパーク推進室・土佐清水市郷土史同好会が、

協同で本年度聞き取り調査を実施することになりました。

*** **

昭和南海地震は、意外と知られていませんが、戦時中の昭和19年と戦後の昭和21年の2回にわたり発生しています。

*** **

本年10月を目途に調査を展開・集積し、これを来年2月に開催される中央公民館サークル文化展に展示し、市民への周知を図る計画です。また、令和6年3月末に刊行予定の『新市史』にもこれらの調査結果を基にした考察を掲載する予定です。

昭和南海地震の証言記録		
生年		
学校及び学年(年齢)		
体験したときにいた場所		
地区名		
自身の体験かどうか	<input type="checkbox"/> 屋内	具体的な場所
	<input type="checkbox"/> 屋外	具体的な場所
	<input type="checkbox"/> 自身の体験	
	<input type="checkbox"/> 伝聞	その方との関係
見聞しましたことから		
地震直後の様子		
揺れた時の状況	恐怖心など印象 どれくらい揺れが続いたか その時とった行動(避難など)	
津波の目撃	<input type="checkbox"/> あり	揺れてからどれくらいの時間で津波が来たか
		潮がどれくらい引いたか、どこまで上がったか
		恐怖心など印象
	<input type="checkbox"/> なし	その時とった行動(避難など)
被害の様子	揺れによる屋内被害(建物被害、家具の転倒) 揺れによる屋外被害(塀、墓石の倒壊、がけ崩れ) 津波による建物などの流出	
周囲の人たちの様子	津波の様子を見に海岸に行っていたかなど	

↑昭和南海地震の証言記録調査票の一部

土佐清水市立市民図書館歴史講座のご案内

【日時】8月27日(土) 10:30~12:00

【場所】土佐清水市立市民図書館2階・視聴覚室

【演題】『中浜東一郎日記』から見た万次郎

講師 市史編さん室長 田村公利

【申込】先着15名

土佐清水市立市民図書館まで (tel.0880-82-4151)

※中浜万次郎の長男東一郎の日記から、人間万次郎とその周辺を探ります

市民図書館講座のお知らせ

『中浜東一郎日記』から見た万次郎

中浜万次郎の長男中浜東一郎の日記から、人間万次郎とその周辺を探ります。


 日時：令和4年8月27日(土) 10時30分~12時
 場所：土佐清水市立市民図書館 2階視聴覚室
 講師：田村公利氏(生涯学習課市史編さん室長)
 定員：先着15名(申込要)


 トリイチ

市民図書館ボランティアは電話(082-4151)に、申込受け付けております。

本講座は、市民図書館の歴史講座の一環として開催され、市民の歴史意識の向上を図ります。また、市民の歴史意識の向上を図るため、市民の歴史意識の向上を図ります。

土佐清水市立市民図書館

(1) 鼻前廻船商人の定義

この節では「鼻前廻船商人」についての実態解明を図り、その論考を深めていきたい。足摺半島の住民は、古くから足摺岬の突出した地形を「鼻」と呼んだ。「鼻前」とは、「鼻」から西側一帯（足摺半島西南部）を指す。この鼻前浦々①を拠点に近世中期から近代初期にかけて江戸・上方・九州方面に地場産物を廻船で海運流通させ、活動していた商人たちを「鼻前廻船商人」と定義する。

彼らは、山に海に生活の糧である物資を求め、材木・木炭・酒類・カツオ節を中心とした海産物等を廻船に集積し、九州や阪神方面、時には江戸にまで物流の手を広げた。特に、カツオ漁・カツオ節加工は、その技術を紀州印南浦の旅漁海民に学びながら、良質なものを生産し、上質の節を江戸や阪神方面、傷節を下関、節加工で出た煮滓を肥料として日向国方面に運搬した②。

この「鼻前廻船商人」に関する研究は、これまで活発になされてきたとは言い難い。カツオ漁や節加工の歴史を含めてこれに辛うじて触れた研究が多数であり、近世に鼻前浦々を据浦として旅漁を行っていた紀州国印南浦海民との絡みのなかで登場しているという傾向が強い。数少ない研究としては、広谷（1968）があるが③、論文主旨が養老新浦開拓に関わる内容であり、元禄期、大浜浦にて酒造販売等により蓄財し、養老新浦を藩入札で競り落とした袋屋九郎兵衛に関わる限定された内容である。鼻前廻船商人の一断片であり、これによってその全体像や実態の輪郭を把握することはできない。

鼻前廻船商人に関わる研究を本格的に行ったのは、『土佐清水市史』編さん時に研究を進めた中山（1980）であり、市域の主な廻船商人について総合的にその実態を記述している④。彼は歴史文献・市域の寺院の過去帳・近世石造物等の膨大な資料を基に『市史』にそれをまとめた。残念なことにこの中山の研究以降、鼻前廻船商人に関

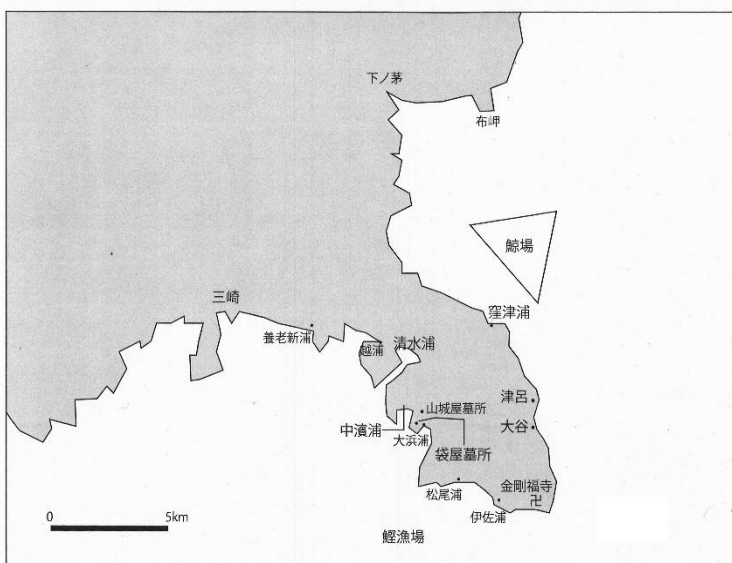


図1 近世末の上佐清水市域集落・漁場位置図

わる目立った研究は、なされてこなかった。僅かに渡邊（2006）の研究において幡多をめぐる流通・人の流れの中で断片的にそのエピソードを文献史料に基づき紹介されたのみである⑤。

筆者は、これまでの中山の研究を継承しつつ、鼻前廻船商人の実態とその動向について一步一步ではあるが研究を進めてきた⑥。中山研究以来、30年以上の空白期間があり、

その歴史の空白に埋もれて研究自体も自然と風化しようとしている。この現状に鑑み、早急に対応する必要があるため、これまでの中山の研究の上に更に筆者の研究を積み重ねることにより、その実態を炙り出し、浮き上がらせていきたいと考える。

(2) 大浜浦を本拠に商売を広げた袋屋一族

袋屋がいつの時代に、どのような状況で大浜に居住するようになったかは不明である。袋屋縁起の伝説によると「袋屋先祖が無間の鐘をつきながら全国行脚し、被っていた笠を逆さまにして、笠一杯に銭貨が貯まった所（大浜浦）で貯まった銭貨を元手に商売を始めた」という。これは、遠州佐夜・中山の曹洞宗・観音寺に伝わる「無間の鐘」伝説を脚色して取り入れた言い伝えであると思われる。話の原型は次のような粗筋である。

ある山伏が、栗ヶ嶽の頂上に所在する観音寺に釣鐘の勧進活動を行った。鐘は国々に響き渡り、この鐘をつくると現世には大金持ちになるが、死後は無間地獄に落ちるといふ噂が一人歩きした。次々と欲深い人が競い合って、この鐘をつくために山を登ってきたが、険しい山道に足を取られて滑落死する人が続出した。このことに心を痛めた住職が、鐘を井戸に投げ込み、埋め立ててしまった。

袋屋縁起には、近世中期から後期にかけて、大浜浦を中心に市域の広い地域で異例の繁栄を誇った袋屋一族に対する、地域の皮肉や嫉妬があったのではないだろうか。

広谷は、『土佐史談第 119 号』にて袋屋九郎兵衛の動向について論考している。元禄十一年（1698）、幡多郡下茅村（下ノ加江）役人・中山源兵衛の子息・新介が藩からの借米をもとに養老浦の開発を行った。しかし、それを返済できなくなり、養老浦が入札されることとなった。このとき 6 年間の無年貢を条件に銀 61 枚で落札した人物が袋屋九郎兵衛である⑦。

彼は、中浜袋屋の当主で中浜長崎台地に所在する袋屋墓所の墓石の銘文を調査すると、彦左衛門（1689 年没）・九郎兵衛（元禄十二年没、1699）・善之丞（享保十八年没、1733）・彦市郎（貞享三年～元文三年、1686～1738）・二代目九郎兵衛（安永八年没、1779）と続く。養老新浦を落札した人物は、恐らく元禄十二年（1699）に没した初代九郎兵衛であろう。

袋屋の先祖は、寛文八年（1668）から酒造販売業を始めた。本家は中浜に所在し、ここから天和年間（1681～84）に窪津・下茅が暖簾分けされた。更に延宝六年（1678）に松尾に新しい酒屋株が譲渡され（伊佐もこの松尾袋屋の商売圏内に属す）、中浜に本家当主の隠居所が設けられた。このように大浜浦から枝分かれし、足摺半島の大浜浦・中浜浦を本拠とし、窪津・下茅・松尾及び伊佐と、現在の土佐清水市域の村々に広範囲で酒造販売を営んでいた。こ



(写真1) 中浜長崎台地の袋屋墓所

のことが「酒甫手根居」に記されている⑧。当時、酒屋株は土佐藩全体で 181 軒、幡多郡では 28 軒と規制されており、酒屋株を持つこと自体が有力商人の一つのステータスであったに違いない⑨。

袋屋九郎兵衛の養老新浦落札は、地域住民の大反発を招いた。彼らは初年度から年貢を支払うことを条件とし、自分たちに浦を下げ渡すように藩に嘆願した。酒屋以外にもカツオ船を持ち、金融業・廻船業にも手を伸ばし、繁栄を極めた袋屋が養老新浦を支配することに対して二重・三重に搾取されることに住民は警戒した。製造・流通・金融を差配し、地域経済を支配する廻船商人に対する住民の根深い不信感や激しい反発心があったためであろう⑩。(続く)

註

①鼻前浦々とは、伊佐・松尾・大浜・中浜・清水・越・養老の七ヶ浦を指し、総称して『土佐清水市史上巻』(1980年)では、「鼻前七浦」と記している。

②中山 進「五以南漁民史」(『土佐清水市 上巻』土佐清水市、1980年、753～1025頁)

③広谷喜十郎「元禄時代における養老新浦の成立について」(『土佐史談 119号』土佐史談会、1968年)

④②に同じ。

⑤渡邊哲哉「近世の幡多」(『街道の日本史 47・土佐と南海道』吉川弘文館、2006年、169～174頁)

⑥田村公利「近世土佐国西南部の鼻前廻船商人の実像—紀州海民の動向と山城屋の足跡を通じて—」(『西南四国歴史文化論叢よど第 14号』西南四国歴史文化研究会、2013年、143～156頁)

田村公利「近世土佐国西南部における鼻前廻船商人の足跡 袋屋関連の石造物及び過去帳等から見た一考察」(『西南四国歴史文化論叢よど第 15号』西南四国歴史文化研究会、2014年、29～48頁)

田村公利「近世土佐国西南部で活躍した鼻前廻船商人の動向(上)」(『土佐史談 264号』土佐史談会、2017年、43～53頁)

田村公利「近世土佐国西南部で活躍した鼻前廻船商人の動向(下)」(『土佐史談 265号』土佐史談会、2017年、21～28頁)

田村公利「近世・地域支配における郷浦庄屋と廻船商人の関わり—土佐国西南部の事例を通して—」(『土佐史談 272号』土佐史談会、2019年、55～63頁)

⑦③に同じ。

⑧「酒甫手根居」は、広谷喜十郎氏が松尾在住・吉福金三氏(故人)から資料提供されたもので袋屋九郎兵衛の先祖書である。

⑨広谷喜十郎『高知県酒造史第二集』高知県酒造組合連合会、1981年、26頁。天和元年も土佐藩内の酒屋内訳表。

⑩③に同じ。

【編集後記】

このところ新型コロナウイルスの感染状況が増加し、第 7 波が到来していると T V・新聞で報道されています。様々に変異し、しぶとく生き残るウイルスとの戦いは長期化しています。昨日(7月12日)の高知県の感染者数は 344 人、同じ四国内のお隣・愛媛県に至っては 1014 人、1 日の感染者数が 1000 人を超える事態になっています。東京都は 10000 人を超え、大阪府も 10000 人に迫る勢いで感染が増加しています。

編さん委員・編集委員各位におかれましては、暑中ではありますが、マスク・手洗い等、感染対策に油断なく、健康第一でこの夏を乗り切ってください。(田村)